

中学校国語 専門問題例

例一 次の文章を読んで、(1)～(7)の問いに答えなさい。(設問の都合上、表記を改めた箇所がある。)

(文章省略)

(1) 波線部ア～ウの漢字には読みがなを書き、カタカナは漢字に直して書きなさい。

(2) 二重傍線部 a～c の品詞名を漢字で答えなさい。

(3) 空欄 X・Y にそれぞれあてはまる最も適切な言葉を次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 協力 イ 境界 ウ 媒介 エ 基本 オ 結合

(4) 傍線部 A は、何を表しているか。言い換えている部分を本文中から二十字以上三十字以内で抜き出して答えなさい。

(5) 傍線部 B とあるが、それはどういう状況のことを言っているのか。二十字以上三十字以内で答えなさい。

(6) 傍線部 C とあるが、それはどういうことか。四十字以上五十字以内で答えなさい。

(7) 筆者は本文において、「家族」とはどういう場であると述べているか。「信頼」「葛藤」という言葉を用いて六十字以上七十字以内で答えなさい。

(令和元年度)

例二 次の文章を読んで、(1)～(7)の問いに答えなさい。(設問の都合上、表記を改めた箇所がある。)

一条院の御時、御秘蔵の鷹ありけり。但しいかにもとりをとらざりけり。御鷹飼ども面々にとりかひけれども、^Aすべて鳥に目をだにかけざりければ、しかねて、件の鷹を粟田口十禅師の辻につなぎて行人に見せられけり。もしおのづからいふ事やあるとて、人をつけられたりけるに、ただの^a直垂^a上下にあみ笠きたるのぼりうど、馬よりおりてこの鷹を立廻り立廻り見て、「あはれ、逸物や。上なきものなり。ただしいまだとりかはれぬ鷹なれば、鳥をばよもとらじ」といひてすぐる者ありけり。その時、御鷹飼いでて、かの行人にあひて、「只今^Iのたまはせつる事すこしもたがはず。これは御門の御鷹なり。しかるべくは、とりかひて叡感にあづかり給へ」といへば、このぬし、「とりかは^アん事いとやすき事なり。われならでは、この御鷹とりかひぬべき人おぼえず」といへば、「^Bいと希有の事なり。すみやかにこのよし叡聞にいるべし」とて、やどなどくはしく尋ね聞きて、御鷹すゑて参りて、このよし奏聞しければ、叡感ありて、則ち件の男めされて御鷹をたまはせけり。すゑて^{II}まかり出でて、よくとりかひて参りたり。

南庭の池の汀に候ひて叡覧にそなへけるに、出御の後、池にすなごをまきければ、魚あつまりうかびたりけるに、鷹はやりければ、あはせ^イてけり。則ち大きな鯉を取りてあがりたりければ、やがてとりかひてけり。御門よりはじめてあやしみを驚かして、そのゆゑをめし問はれければ、「この御鷹はみさご腹の鷹にて候。まづかならず母が振舞をして後に父が芸をばつかうまつり候ふを、人そのゆゑを知り候はで、^cいままで鳥をとらせ候はぬなり。このちは、一つもよもにがし候はじ。^b究竟^bの逸物にて候ふなり」と申しければ、叡感はなはだしくて、所望何事かある、申さむにしたがふべきよし、仰せ下されければ、信濃の国のひぢの郡に屋敷・田園などをぞ申しうける。

(『古今著聞集』より)

(注)「とりかふ」Ⅱ飼い仕込む。飼料を与える。「みさご腹」Ⅱ魚を捕らえるみさごを母とする鷹の子。

- (1) 二重傍線部 a については漢字の読みを、b については意味を、それぞれ書きなさい。
(2) 傍線部 ア・イの助動詞について、文法的意味と活用形をそれぞれ答えなさい。
(3) 傍線部 I・II は敬語であるが、誰から誰への敬意を表したもののか、ア・エからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 御鷹飼 イ 御門 ウ かの行人 エ 作者

- (4) 傍線部 A を現代語訳しなさい。
(5) 傍線部 B は、何に対して言ったものか、三十字以上三十五字以内で説明しなさい。
(6) 傍線部 C の理由を、「母が振舞」と「父が芸」の意味する内容に触れて、三十字以上三十五字以内で説明しなさい。
(7) 「古今著聞集」と同時代・同ジャンルの作品を、ア・エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 今昔物語集 イ 十訓抄 ウ 竹取物語 エ 方丈記

(令和二年度)

例三 次の文章を読んで、(1)～(6)の問いに答えなさい。(設問の都合上、表記を改めた箇所がある。)

伝^ニ曰^ク、賞^ノ疑^{ハシキハフ}從^レ与^{フルニ}。所^ニ以^テ広^ム恩^ヲ也。罰^ノ疑^{ハシキハフ}從^レ去^{ルニ}。所^ニ以^テ慎^ム刑^ヲ也。当^{リテ}堯^{ガウ}之^ニ時^ニ、皐^{カウ}陶^{エウ}為^ル士^ト。将^レ殺^レ人。皐^{カウ}陶^{エウ}曰^フ、殺^{サント}之^ヲ三^{タビ}、堯^{ガウ}曰^フ、宥^{ゆる}之^ヲ三^{タビナリキ}。故^ニ天^ニ下^ニ畏^レ皐^{カウ}陶^{エウ}、執^ル法^ヲ之^ニ堅^{キヲ}、而^{シテ}樂^{シメリカ}堯^{ガウ}。用^{フル}刑^ヲ之^ニ寬^{ナルヲ}。四^ニ岳^ニ曰^ク、鯀^{コン}可^{シト}用^フ。堯^{ガウ}曰^ク、不^{ナリ}可^{ナリ}。鯀^{ハウシ}方^レ命^ヲ圯^{やぶ}族^{ルトヲ}。既^{ニシテ}而^{シテ}曰^ク、試^{ミント}之^ヲ。何^ソ堯^{ガウ}之^ニ不^{シテ}聽^カ皐^{カウ}陶^{エウ}之^ニ殺^{サントスルヲ}人^ヲ、而^{シテ}從^{ヘル}四^ニ岳^ニ之^ニ用^{ヒントスルニヲ}。鯀^{コン}也。然^{ラバ}則^ニ聖^ニ人^ノ之^ニ意^ニ、蓋^ニ亦^シ可^シ見^ル矣。書^ニ曰^ク、罪^ノ疑^{ハシキハレ}惟^{クセヨ}輕^{クセヨ}功^ノ疑^{ハシキハレ}惟^{クセヨ}重^{クセヨ}。与^{リハ}其^ノ殺^{サン}不^{コラ}辜^ニ、寧^ロ失^{セヨト}不^{コラ}經^ニ。嗚^ウ呼^フ。盡^{セリ}之^ヲ矣。可^ク以^テ賞^ス、可^シ以^テ無^{カル}賞^ス。賞^{スレバ}之^ヲ過^グ乎^ニ仁^ニ。可^ク以^テ罰^ス、可^シ以^テ無^{カル}罰^ス。罰^{スレバ}之^ヲ過^グ乎^ニ義^ニ。過^グ乎^ニ仁^ニ、不^レ失^ハ為^ル君^ニ子^ニ。過^グ乎^ニ義^ニ、則^チ流^{レテ}而^{シテ}入^ル於^ニ忍^{ニン}人^ニ。故^ニ仁^ヘ可^レ過^グ也、義^ヘ不^レ可^レ過^グ也。

(『続文章軌範』より)

(注) 「伝」 古い書物。

「士」 裁判官。

「方命」 命令を放置すること。

「不辜」 無実の人。

「堯之時」 堯帝の時代。

「四岳」 四方の諸侯。

「圯族」 善人を害する。

「失不經」 法に従わないこと。

「皐陶」 帝の臣下。

「鯀」 人名。

「書」 書経。

「忍人」 残忍な人。

- (1) 波線部①～③の漢字の読みを送り仮名も含めて現代仮名遣いで書きなさい。
- (2) 傍線部Aを書き下し、現代語訳もしなさい。
- (3) 傍線部Bは誰をどうすることか。十字以内で答えなさい。
- (4) 傍線部Cを現代語訳しなさい。
- (5) 傍線部Dが表す内容とほぼ同意の部分本文から漢字二字で抜き出しなさい。
- (6) 傍線部Eとあるが、『仁』は過ぎててもよいが、『義』は過ぎてはいけない」という理由を、「仁」と「義」を対比しながら、四十字以上五十文字以内で説明しなさい。

(令和元年度)

例四

中学校学習指導要領「第2章 各教科」「第1節 国語」の内容について、次の(1)

(5)の問いに答えなさい。

- (1) 次の文は、「第2 各学年の目標及び内容」「第3学年」「1 目標」の一部である。
① ② ③ ④ にあてはまる語句を答えなさい。

- (2) ① や深く共感したり ② したりする力を養い、社会生活における ③ の中で伝え合う力を高め、 ④ を広げたり深めたりすることができるようになる。

- (2) 次の文は、「第2 各学年の目標及び内容」「第1学年」「2 内容」「知識及び技能」の一部である。
① ② ③ ④ にあてはまる語句を答えなさい。

- (3) 我が国の ① に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
ウ ② の果たす役割について理解すること。
エ 書写に関する次の事項を理解し使うこと。
(ア) 字形を整え、 ③ 、配列などについて理解して、 ④ で書くこと。

- (3) 次の文は、「第2 各学年の目標及び内容」「第2学年」「2 内容」「思考力、判断力、表現力等」の「C 読むこと」の一部である。
① ② ③ ④ にあてはまる語句を答えなさい。

- (1) 読むことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
ア 文章全体と部分との関係に注意しながら、 ① との関係や ② の仕方などを捉えること。
ウ 文章と ③ などを結び付け、その関係を踏まえて内容を ④ すること。

- (4) 次の文は、「第2 各学年の目標及び内容」「第3学年」「2 内容」「思考力、判断力、表現力等」の「B 書くこと」の一部である。
① ② ③ ④ にあてはまる語句を答えなさい。

- (1) 書くことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
エ ① に応じた表現になっているかなどを確かめて、 ② を整えること。
オ 論理の展開などについて、読み手からの ③ などを踏まえ、自分の文章のよい点や ④ を見いだすこと。

- (5) 次の文は、「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の一部である。
① ② ③ ④ にあてはまる語句を答えなさい。

- 3 教材については、次の事項に留意するものとする。
(2) 教材は、次のような観点に配慮して取り上げること。
ウ 公正かつ ① 能力や ② を養うのに役立つこと。
オ ③ について考えを深め、豊かな人間性を養い、 ④ 意志を育てるのに役立つこと。

中学校国語 正答例

例二							例一							問題番号			
(7)			(4)					(1)	(7)	(6)			(3)	(2)	(1)	正 答 例	
イ	(正答例)鳥を捕ることを身に付ける前に魚を捕ることを教え込まれていなかったから。	(正答例)扱いかねていた御門の鷹を飼い仕込むことができるといふ人が現れたこと。	(正答例)まったく鳥に目さえかけなかったので	Ⅱ	Ⅰ	イ	ア	a	(省略)	(省略)	(省略)	(省略)	X	a	ア		
				誰から	誰から	意味	意味	ひたたれ					きわめて優れていること	ウ	副詞		干渉
				エ	ア	完了	婉曲	b						Y	b		イ
				誰へ	誰へ	活用形	活用形	活用形						連用形	連体形		オ
				イ	ウ								c	ウ	行儀		
														名詞			

例四										例三							問題番号		
										(6)	(5)		(3)			(1)	正 答 例		
③	①	①	①	③	①	③	①	③	①	しまうから。 題はないが、「義」が過ぎると残忍な人になってしまうから。	罰疑（「罪疑」も可） （正答例）「仁」が過ぎても君子とすることに問題は無いが、「義」が過ぎると残忍な人になってしまうから。	方がよい、と。 （正答例）無実の人を殺すよりは、法に従わない方がよい、と。	（正答例）鯨を登用すること。	現代語訳	書き下し	① すなわち			
人生	適切に判断する	助言	目的や意図	図表	主張と例示	文字の大きさ	言語文化	人との関わり	論理的に考える力					②					
														けだし					
														③					
④	②	②	②	④	②	④	②	④	②	豊かに想像	自分の思いや考え	共通語と方言	楷書	登場人物の設定	解釈	文章全体	改善点	創造的精神	たくましく生きる